【本日のイントロダクション】

● 院生全員の研究計画書にかかわる共通の課題　＝「いかなる記号で、意図した意味をいかに伝えるか」ということ。

→　ならば、以下のような問いが生まれてくるのでは？

ex.)
・なぜ、どのように記号が意味を伝えるのか？　・「意味」とは何か？　・「記号」とは何か？
・作品に解釈において、正しい解釈や、誤った解釈はありえるのか？　・「意味論」とは？　・「記号論」とは？

→さらにその問いから、古代からの哲学的根本的問題にもつながるはず。

「記号 、つまり単なる物質が、意味をもつ」という、身近で当たり前だが、考えてみると驚くべき現象の気づきから、「物質がなぜ意味をもつのか」という根本的問題 (=〈心身問題〉) へ

哲学には様々な難問があるが、その中でも横綱級なものとして「意味の成立」という難問があります。言葉はどうして意味を持つのか、言葉はなんで通じるのか、と言いかえてもいい。とこう書いた単なる『インクの滲み』が複雑な模様にすぎないのではなく、一定の意味を担っていて、日本語を知っている人にそれを伝えることができるのは不思議です。こうした問いかけの背後には、漠然と、単なる物質だけから成っている『インクの滲み』の構造をどこまで精密に調べても『意味』は発見できないだろう、という想定がある。そして、この問いに答えるには、どうしても物質ではないもの、精神的なもの、心に関わるものが必要になってくるような気がするのです。すなわち、これはもっと通俗的な『心身問題』と同じ問いに収斂すると言っていいでしょう

(中島義道『生き生きした過去：大森荘蔵の時間論、その批判的解読』東京：河出書房新社、2014 年、18-19 頁。)。

→ ただし、この演習では「心身問題」は直接扱わず、藝術文化研究の文脈から「記号と意味」の問題を考える。

● 論文精読：渡辺裕「音楽における意図と意味」（1984）をなぜ 読むか

- 研究作法を実践的に知るために読む。
  （ 論の展開方法、主張の仕方、先行研究の使い方、注釈の使い方、資料収集、他 ）

- 代表的な研究的視点を知るために読む
  (藝術文化研究における基本的な研究的視点のいくつかを知るために)
  「作者の意図」の問題、「語用論」、「意味論」、「記号論」

要　約

渡辺裕「音楽における意図と意味」、『研究』第二巻、東京大学文学部美学藝術学研究室、1984 年、83〜112 頁。

「一　はじめに」

0 段落目（ p.83)

01. 歌詞のない音楽は、言語が意味伝達を行うのと全て同じ仕組みで〈概念〉を伝達することはできない。
02. それでも、人は、歌詞がない音楽であっても、そこになんらかの意味が存在していると〈直観〉的に感じている。
03. たしかに音楽と言語は違うメディアだ。
04. しかし異なる両者であっても、〈意味〉（意味伝達・意味解釈）という事柄が共通して存在する。
05. したがって、〈意味〉において二つのメディアに共通する側面を明らかにしていくことも研究すべきことであろう。
06. そしてこの研究にはまた、いままで見えなかった言語メディアがもつ意味作用の新たな一面を明らかにする可能性も秘めている。

1 段落目 (pp.83-84)

01. 意味作用の研究において、言語モデルの形式を音楽メディアにも安易に適用するならば悪しきこじつけになるだろう。
02.「意味」の定義も必要だ。
03. そこで私たちは、言語の現象に限らず、およそ〈コミュニケーション〉と呼ばれる現象の中で考えていきたい。
04. つまり、〈コミュニケーション〉という次元で意味作用を成立させる根本条件を明らかにしてみたい。
05. それによって、音楽メディアも包摂する考え方が明らかにできるだろう。

2 段落目 (p.84)

01. 私たちは指示的意味が成立する現象の表層ではなく、その現象を根底で支える条件を明らかにしようとしている。
02. 私たちと同じ方向性をもつ研究では、近年（1984 年現在）めざましい展開をとげている〈語用論〉(pragmatics) がある。
03.〈語用論〉は、言外の意味がなぜ成立するかについて、あらたに〈発話行為〉という観点から解明することを課題の一つとしている。
04.「言外の意味」とは、比喩、皮肉、〈会話の含意〉(P・グライスによる用語)、〈間接言語行為〉(J・サールによる用語) などに現れる。
05. つまり〈語用論〉は、発話された言語の意味について、それが実際の文脈の中で発話されたものであることを考慮する視点をもつ。
06. そして発話者がいかなる意図をもってその言葉を述べたかを問うものである。
07. したがって〈語用論〉は、発話を、言語の次元のみならず、〈コミュニケーション〉という、より一般的な次元で考えようとするものだ。
08. そして、〈コミュニケーション〉の次元から、言語の意味作用の成立条件を明らかにしようとするものだ。
09. この論文では、この〈語用論〉の視点を使う。
10. 音楽を作曲家と聞き手との間の意図的コミュニケーションと考えてみたい。
11. その限りで、音楽と言語は、全く同様な根本条件において意味作用が成立することを明らかにしたい。
12. また、音楽は作者が聞き手に〈作品〉として提示されるものとも考えてみたい。
13. その限りで、音楽（非言語的藝術全般）が、「一つの特殊なあり方を示している」ことも明らかにしてみたい。